

用語を練るということ

学長 渡辺利夫

論理とは概念の積み上げである。概念は長い歴史的時間の中で先学の知的努力を通じて磨かれてきたものである。したがって論理的な文章を書こうとすれば、書き手は既存の概念に縛られて叙述の自由を制約されざるをえない。論理的な文章がしばしば面白くもおかしくもないのはそのためである。他面からすれば、既存の概念を羅列していけば、「それなりの」文章が仕上がるというわけであるから、ある程度の概念的思考に馴れてしまえば後は楽なものである。そうした安易な論文を総合雑誌などでままた目にする。しかし、それらは所詮は死んだ文章である。

既存の概念を踏まえながら、生き生きした文章を書き上げるというのは至難の技であるが、そこにもものを書く人間の力量が問われているのだと私は思う。その場合、私が努めているのは、「おや」と思われるような表現を用いてみることである。「おや」というわけであるから、そのところで文章は少し「飛ぶ」感じになるが、その面白さで読者の関心を引きつけてみようという技法である。論理の全体が飛んでしまっては元も子もないが、文章の中に少しばかりはこういう「遊び」の要素を含ませることによって、長い退屈な文章の弊を少しでも救いたいと思うのである。

書き終えて、へえどうしてこんな用語法を思いついたのかなあ、結構面白い表現をちらばせて書いたものだなあ、とわれながら思う論文が私にもいくつがある。こういう論文は、どういうわけか、短時間で書き上げたものが多い。短い時間の中での執筆というのは筆に勢いがあって、黙思を繰り返しながらゆきつもどりつ原稿よりも、かえって軽妙な表現を思いつかせる効果があるのかもしれない。

研究所紀要に掲載される学術論文などにも、そういう「遊び」が多少はあってもいいのではないか。